

## 友田錫教授のご退任に際して

戦場でも駆け巡りそうながつしりした体軀、しかし剛直さの中に同時に優しさと知性とを秘めた人、それが友田先生の第一印象であった。

先生が山陽学園短期大学教授から当アジア研究所の教授として着任されたのは、平成四年四月であった。早いものであれから十三年、先生が定年退職の日を迎えられることになった。

友田先生はアジア研究所の各種研究プロジェクトで健筆を揮われる一方、国際関係学部、経済学部で東南アジア研究、国際報道論、太平洋経済圏論などを担当され、また同時に大学院経済学研究科にて専門ゼミを持たれた。先生が当大学で経済系の科目を担当されたのは、高等学校時代に漠然と抱いておられた「経済学者になりたい」という夢の実現であったかもしれない。しかし、先生の真髄は何と言ってもジャーナリストであろう。

早稲田大学仏文科時代、「世界の鼓動を肌で感じ、自分の目で確かめ、読者に伝えたい」との思いを抱いておられた先生は、昭和三十三年に大学を卒業すると先ず東京新聞社の編集局外報部の記者となられた。こうして夢の実現へと一歩踏み出された先生は、その後産経新聞社に移籍されてからも専ら外信畑を歩かれることになる。外ではサイゴン特派員、プノンペン移動特派員、パリ支局長として活躍される一方、本社では外信部長、編集局次長、論説委員などの要職を歴任された。そこでは、大学時代に習得されたフランス語がフルに活用されたのである。

ベトナム戦争が激しくなった頃、友田先生は南仏の大学に留学されたが、そのことが旧フランス領であったイ

インドシナと先生との関係を決定付けたようである。ベトナム戦争の取材中に先生が見たものは、「同胞相食む内戦の救いのない酷さ」と隣国カンボジアで吹き荒れたベトナム人狩の嵐であったと言われる。

友田先生が世に問われた論文、著書、訳書は多数あるが、その多くはインドシナとの深いかわりの中から生み出されたものである。例えば『裏切られたベトナム革命』（昭和五十六年、中央公論社）は、チュン・ニュー・タン元ベトナム臨時革命政府司法相とのインタビューを基に、ベトナム戦争における共産側の戦略を説明したものである。その他にも日米インドシナ共同研究プロジェクトの一環として出版された『台頭するベトナム―日米はどう関わるか』（共著、平成八年、中央公論社）、『Vietnam Joins World』（共著、平成九年、M. E. Sharpe, New York）など、インドシナとの関わりを示す著作が多い。

インドシナ諸国の中でもカンボジアには、ほとんど愛着に近い感情を抱かれておられるようであり、多数の論文、訳書がある。「カンボジアに平和は来るか」（平成元年十一月、正論）、「カンボジア新政権とインドシナ新局面」（平成五年、アジア研究所紀要）、「カンボジア和平は幻だったのか」（平成九年、中央公論、第二三五七号）、「安定期に入ったカンボジア」（平成十二年、平和・安全保障研究所、特別報告二〇〇―一号）など数十点に及ぶ。

また、訳書でも『北京からみたインドシナ』（昭和四十七年、サイマル出版社）、『シアヌーク回想録』（昭和十五年、中央公論社）、『ポルポト派の素顔』（監訳、平成六年、NHK出版）などがある。これらの多数の著作こそ先生がわが国におけるカンボジア研究の第一人者であることを証明するものであろう。

もちろん、先生のフィールドはインドシナだけではない。日本の政治・外交やメディアに関する論文も数多く

書かれている。日中正常化後における日本外交の質的変遷を分析された『入門・現代日本の外交』（昭和六十三年、中央公論社）などは、その代表的なものである。先生はまた著作ばかりでなく、メディアの世界でも活躍されており、NHKの「視点・論点」、「あすを読む」、「クローズアップ現代」などの番組にもよく出演されていた。

長期にわたってご自身がおられたメディアの世界に関しても卓越した考え方を持っておられ、最近における国際報道の変節に忸怩たるものがあられたようである。国際メディアに対する先生の分析、主張は本誌に掲載された最終講義に凝縮されているが、先生の「国際報道論」を聴講する機会に恵まれた学生は幸せであつたと思う。

友田先生の研究、執筆活動を語る場合、もう一つ銘記しておかなければならないことがある。それは研究事象に対する正確かつ緻密な分析を表現する格調高い文章である。先生は平成十七年四月に財団法人日本国際問題研究所所長として栄転される予定と伺っているが、同研究所とは執筆活動を通じて、以前から関係が深かつたようである。同研究所の月刊誌『焦点―世界の今を読む』での深い洞察力に基づいた文章は前々から評価が高かつた。友田先生の分析力と文章力には思わず引き込まれてしまうんだよ。米国の政治・外交を研究しているある大学教授のこの言葉に先生の魅力のすべてが言い尽くされているように思う。

友田先生は平成十四年四月から十六年三月まで、当研究所の所長を務められた。研究所でいくつかの研究プロジェクトに参加されながら大学全体の業務にも携われたため、相当にご多忙な日々を過ごされたはずである。そんな中でも、昼休みになると当研究所には様々な人々が集まり、友田先生を中心に現下の国際情勢に関して熱い論議が交わされた。アジアを研究対象とする専門家の集うサロンは正に「知の泉」であつた。この貴重な遺産は

大切に継承して行きたいと思う。

個人的には「烏鷲の争い」が忘れ難い。日本国際問題研究所所長という要職に着かれる先生には余り時間的余裕はないかもしれないが、まだ白黒の決着がついていないことを忘れないでいただきたい。

十三年間のご指導に感謝しつつ、友田先生の益々のご健勝、ご活躍をお祈りいたします。

(平成十七年三月末日、アジア研究所長 小林熙直)